

今江祥智の本

第36卷

子どもの本の狩人

今江祥智 の本

第36卷

子どもの本の狩人

理論社

今江祥智 の本

第36巻

子と本の狩人

図書館

蔵書章

理論社

今江祥智の本第36巻

一九九〇年十一月初版

一九九〇年十一月第一刷

著者 今江祥智◎

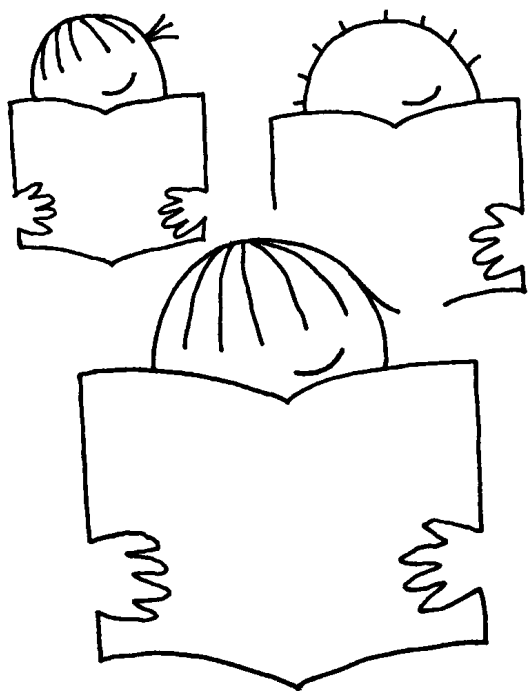
発行 株式会社理論社

東京都新宿区若松町一五―六

電話〇三(二〇三)五七九一〈代表〉

振替東京九―九五七三六

落丁・乱丁本はお取り替えます。



		a	
		子どもの本の狩人	7
		子どもを読む	9
		夢見る理由再説	18
		戦士の休息	31
		ケストナー―生誕九十年	36
		大人↑子ども	39
		子どもの本の狩人	44
		構想力と持続力	136
		ロマン・ロランの周辺	139
b			
	見る	143	
中年ちゃんぼらんとクリスタル・ヤング			
145			
父と子の現在			226
	優しさとは？		222
	しおり		216
	眼		189
	c		
	読む		187
	ひとつの未来像		183
	好奇心の文法		179
	忘れ得ぬシネマシーン		178
	二つの『E.T.』		175
	二つの『シャイニング』		172
	モンタン二つ		155

前略 鳥越信様	231	d わたしの周辺	263
『あつおのぼうけん』	233	ぼくのサークル史	265
『最後の子どもたち』	235	行方不明	270
『絵本論』	241	子どもから子どもたちへ	274
『頭にいっぱい太陽を』	244	自分の本のこと	283
『いつも音楽があった』	247	わが童話術	303
『けんかえれじい』	250	老いと死をめぐる	313
『家庭薬局』	252		
『アフターマン』	254		
『子どもの宇宙』	257	あとがき	333
『心の中にもっている問題』	261	解説 神宮輝夫	337

編集 小宮山量平

装幀 平野甲賀

装画 長新太

制作 山村光司

発行 鈴木良司

製作担当 金井重雄

下向実

編集担当 日比野茂樹

高林久美子

成澤荣里子

製作 P & P

加藤文明社／よねむら写植

表紙 ダイニツク

カバー トラヤ印刷

誠製本

用紙 十條製紙／日興紙業

今江祥智の本
第36卷

子どもの本の狩人

a

子どもの本の狩人

子どもを読む

〈ひとはみな

心のなかに

海をひとつ もっている

その 濃いみどりの海のうえに

ときどき ちいさな魚がはねて

ときどき ちいさなしぶきがたつ

ひとの心のなかに

いつ 海はうまれたか……〉

工藤直子の詩「海のはじまり」の冒頭である。そしてこの詩はこの五月に刊行される童話『ともだちは海のにおい』の冒頭に置かれている。工藤直子は自分の心の中の海にイルカとクジラを発見して自在に語らせ遊ばせた。ふたりは、いつまでも心の中にピーター・パンを生かし続けられる大人のように語り合い一緒に遊ぶ。工藤直子は、おっとりとして気のいいクジラの中に子どもを読みとっているし、その親友の、ちょっと気の弱いが心優

しいイルカにも子どもを読みとっている。

ふたりの出会いは詩集『てつがくのライオン』に見ることができる。「恋するクジラ」や「こわがりのときの海豚」で、ふたりは友だちとしてのつきあいを始めている。それを読んだ慧眼の編集者が、そのふたりの中に子どもを読みとり、そのつきあいの全貌を語ってくれるよう詩人に依頼し、一年のうちに一冊分の作品が書きおろされたという。古くはクマのプーとコブタ、新しくはスヌーピーとウッドストックにも似た、魅力ある新コンビが国産童話の中に生れたことを喜ぶたい。

工藤直子は、詩人の直感、詩人の目でふたりの友情の中に、子ども同士の本物のつきあいを読みとり、とりだし、描き出すことに鮮かに成功している。凡百の動物擬人化童話のように平凡で教訓的なものに陥ることなく、イルカでありクジラでいながら、大人のようにおかしく、子どものように賢明なふたりとして創造されている。

この作品は詩と掌篇のオムニバスで、一見ヒメネスの秀作『ブラテローとわたし』のような体裁をとっている。しかしヒメネスのものよりもずっとし下の子どもからでも読め、ヒメネスの愛読者たる大人にも充分に面白いものに仕上げられている。詩集『てつがくのライオン』もそうだったように、子どもから読めて大人にも面白い子どもの本が、また一冊誕生したわけである。大人の中の子どもの本であり、子どもの中の子どもの本というやつがまた一冊出版されることになる。

数年このかた、わたしが言い続け、むろん自分でもそうしているつもりの傾向の一冊が書かれたことを喜びたい。肩肘張らずに、子ども大人にこだわることなしに、自由な発想と文体、文章で書かれたものが、そのような一冊になることが何よりも望ましいわけだから、工藤直子はそうした望みをまた一つ叶えてくれたことになる。

ところで、そのような「越境」というか、子どもの本と大人の本の国境のようなもの、いわゆる児童文学と大人の文学の間にある国境のようなものを自由に往き来する越境者たらんことを願い、越境者探しもしてきたつも

りの私の目には、例えば倉本聰や山田太一のシナリオのいくつかは、大人の側からの越境者であった。書き手は読者としての子どもを多分意識していなかったにちがいない。しかし、子どもを主人公に据えることによって、子どもの目で大人や世界を視たり割ったりすることになり、その子ども読みの確かさが、いつか大人の読者も、惹きつけるようになる。『北の国から』が理論社から出版されたとき、児童向けの大長篇シリーズと、大人向けの文芸書版が同時出版されたのは象徴的なことであった。小宮山量平という編集者の読みの的確さがそこにあらわれていた。結果としてこの作品は子ども若者から大人までの幅広い読者を獲得した。この作品が子ども大人と一緒に観るテレビドラマの脚本ということも力あった。わたし個人の体験からいっても、子どもがテレビドラマや映画を読みとる力というのは、活字文化世代の大人が思っているところをはるかに上まわるものがある。

同じ伝でいうと山田太一の小説『終りに見た街』は、ある一家が昔の友だちの親子ともども現在からいきなり昭和十九年に移行される——というSF仕立てのうまさによって、大人子どもを同時にあ、い、く、さの時代に投げこんだ。戦争体験をどう語り伝えるか、戦争を知らない子どもたちに、抵抗感少なく教訓臭さなくどのように読ませるか——といったことに、いわゆる戦争児童文学の書き手たちや教師や親たちが腐心しているときに、山田太一はSFの手法を活用することによって、そのことをあつさりとうまくやってのけている。昔の事実を知っている親たちは、三月十日の東京大空襲の死者を少しでもなくしようと、ビラを書いて配り、人々に告げて歩いては「非国民」扱いされる。しかし、急速に軍国少年少女化した子どもたちは、今、お国のために戦っている自分たちの立場から、そうした親たちの「反戦」活動を論難する。単に戦争をなぞるだけでなく、今の世代の対立を、あ、の、時、代、にもちこめばどうなるかということが新しいドラマにされ、更に怖るべきドンデン返しの結果は、この作品を単なる戦争ものではなく、来るべきいくさへの予告にも仕立てている。これは、作者が極めて意識的に子ども大人の両方の読者を考えて書かれた「越境」もののようにわたしには思われる。しかしまた、作者が無意識に書い

たものが、すぐれた出来になったとき、子どもの読者をも惹きつける場合もよくあるものだ。最近のものでは『ウホッホ探険隊』（千刈あがた）がそうだった。これはすこぶる今風な子どもことばのやりとりで活写された「離婚もの」である。しかし離婚ものにありがちなうらみがまじさやじめじめした雰囲気はない。父さんに新しい女人が出来たため離婚に踏み切った母親の目から見た離婚後の子どもたちを描く体裁をとっているが、子どもの目と子どもことばをもった母親をかなりコミカルに描いている。親と対等に軽快にやりとりし、ときどき親をガッカリよろこばせてくれる子どもが生き生きと描かれる。

―僕たちは探険隊みたいだね。離婚という、日本ではまだ未知の領域を探険するために、それぞれの役をしているの。

と言いきる太郎にしても、母親が離婚後、夜のジャズコンサートへいくと、「後家さんは身をつつしみなさい」と言うおばあちゃんにしても、そう言われて吃驚し、離婚の場合も後家さんと言うのかしらと国語辞典を引いてみてあったと確かめる母親にしても大層現代風だ。

また、何かお話して――と寝物語をせがむ次郎にしても、母親が「昔々、あるところにねえ」とやり出すと、――そんなへたいら」な話じゃなくて。

と言う。そしてあっさり「父は品切れです」と言ったあと、こまっちゃくれた口調で「ああ、眠れない。申し訳ないけど、僕、むこう向きの方が眠れるから、むこうを向くよ」と告げ、寝返ってから眠そうな声で言う。

「僕の背中、おとこを感じるでしょう」

それに対して母親は吹き出し、「こどもを感じる」と答えるところでしめくくられている。

この作品に注目した宮川健郎は、

「大人の読む小説が子どもというテーマを児童文学と共有しようとしているいま、小説の侵攻をむかえつつ児

童文学は、それが描く子ども像や子ども観をさらに鍛えていかなければならない」(図書新聞)と書いている。

侵攻とかむかえうつとか、まるでスターウォーズみたいな「激励」のことばだが、いわゆる子どもの本の批評家が、そうした立場で大人や子どもの本を対に眺め論じることとはもっともとなされるべきではないか。

とはいうものの、そうしたいいくつかの作品が生れたからといって、いわゆる児童文学と大人の文学の国境がとり払われるわけではむしろなく、逆に新しい国境線といったものを感じさせる作品もある。

岩瀬成子の新作『額の中の街』がそうだった。この本の帯の背には「鮮烈な少年文学」とある。テーマも、描かれる少女たちの生き方も鮮烈だ。しかしこれははたして少年文学だろうか。

『朝はだんだん見えてくる』で出発したこの作者が、基地の街を再びとりあげて、外側からでなく、内側から眺め、見つめ、描こうとしたのは当然のことかもしれない。いまでも、アメリカのヘイタイたちがごろごろしている街と人の中で、少女はいつたいどう生きるのかという主題が、こんどは前作とはちがって、ニホン人ではない日本人という苦い生れと育ちをしなければならない主人公を軸に描かれている。

父、アメリカ人、母、日本人。しかも尚子という娘を産んでアメリカへ渡った母親は、弟も産みながら、尚子一人つれて日本へ帰ってきてしまう。元の街の外人バーで働き、次々とヘイタイをつれて帰ってくる母親。一方、ヘイタイのどんな個性も好きになれない尚子が、自分を守るのは自室に籠って鍵をかけることだけ。そうしてドア越しに様子を窺うだけの娘に、母親はこう言うのだ。

―おまえは、わたしが産んだ子供なのよ。どうしてそんな目でわたしを見るの。わたしに腹でも立てているの？ わたしがお前の母親だから。……いつだって、おまえはそう思っているでしょ。わたしなんかじゃなくて、どこかの立派な金持の女がおまえを産んだのならよかったのにつて、そう思ってるでしょ。わたしには解ってい

る。だけど、残念なことに、わたしがお前を産んだのよ。海軍病院でね。アメリカ人の軍医や看護婦に助けられて、お前は生まれたのよ。……おまえが、いくらそんな、軽蔑するような目でわたしを見て、わたしは平気よ。わたしはわたしのやり方で生きているのだし、おまえだってちゃんと立派に育てているんだから……。

そのくせ、「仲たがしいした友だちに許しを乞うように」すぐに詫げるのだ。娘のしたがることは一も二もなく許し、そのかわりに自分も許されたがる母親……。

これまでの国産の児童文学に描かれることのなかった親子像である。そのまわりで友人が妊娠する。米兵に身売りつくし、全裸で惨殺される娼婦。しかもそれをやったのは母親のかつての愛人だったヘイタイだ。それから母親はある日唐突にロバートという三十四歳の米兵と一緒になろうと思っているのよと言います。

—いやなの？ 反対するの？

—大喜びってわけにはいかないな。

—困ったわ。

—困ることはないでしょ。ママが結婚したいのならすばいいわ。

—へんな言い方するのね。

といった会話は『ウホッホ探険隊』の母と息子の対話の裏返しみたいだ。わたしたちが日常生活の中から拭い去り、あたかもないかのように思いこみたがっている基地の街の体臭の中では、軽やかに乗りこえていこうとするにはあまりにも重くて苦い現実が子どもたちをもしめつけていることが、『額の中の街』では執拗に描かれている。その子どもたちは作中の犬のように生きねばならない。〃両方の動かない後足をひきずりながら、頭を反らし、漕ぐようにして道を渡ってくる。汚れた白い毛のあちこちに毛玉ができ、首にはちぎれた綱が巻きついていた……”というふうに……。そして尚子も、高校生のような顔をしたヘイタイに誘われて、安ホテルのベッド